

た。行政も既存地域住民組織も、これに  
対して、そこに「子ども文化センター」  
が必要でない、という論理をもてなくな  
った。こうして出来たセンターは、管理  
者である行政の規則一点張りでは動かな  
い血の通った活動を始める。母親とセ  
ンター職員は議論し学びあい、自己変革  
をくりかえす。そして、職員はその地域  
にすすんで転居し、あるいは「教育学を  
やり直す」と大学の通信教育を受けはじ  
める。十年間は少くともこの仕事に打  
ちこむ」と決意する。母親たちはこの  
「子ども文化センター」つどう会」会員  
として、地域社会の内面論理を形成しつ  
つある。これは、福祉・教育(共育)・自  
治を一体のこととして住民が主人公にな  
り地域文化を創造してゆく清新で感動的

## 地域文庫の活動

### 全国の一割が横浜に

地域文庫が多いのはわが国の特色だそ  
うです。全国で約三千と推定されていま  
すが、その一割が横浜にあります。これ  
は異常というほかありません。その最大  
の理由は、住民の読書及び読書施設に対  
する要望が多いわりに、図書館が少なす  
ぎることです。それは、図書館のある西

なドラマである。ちなみにこのマチは山  
林を開いた典型的な新興住宅地である。  
菅生だから出来たのではない。横浜に  
も同じ可能態が多様に生起し動いてい  
る。文庫活動が、保育活動が、障害者や  
老人への福祉活動が。いずれも生活の場  
でその地域生活を楽しく、人間らしい共  
感と共育の場にかえてゆく文化創造の芽  
である。文化には、考えたい、知りたい、  
感じたい、表現したい、行動したい、と  
いう衝動が必須である。それが生活の場  
の状況に応じて個性的に今や実ろうとし  
ているのだ。その個性を尊重しあい、励  
ましあい、過去の遺産を正しくうけつい  
で、市民が生活の場から生きざまとして  
の歴史を創造する、そういう文化課題が  
まさに現前している、と考える。

### 横浜文庫の会 長崎源之助

区には文庫が少なく、図書館から遠い戸  
塚区、港北区にとくに多いことでもわか  
ります。

地域文庫をはじめた動機としては、「わ  
が子に本を読ませたいから」というのが  
圧倒的に多いのです。そのあらわれとし  
て、多くの文庫が、子どもの利用を中心  
に運営されています。

小規模のは、縁側に書架を一つ置いた

り、玄関の下駄箱の上に本のはいったダ  
ンボール箱をのせ、近所のごく少数の子  
どもをあいてに本を読んでやったり、貸  
出しをしたりしているのから、会員千人  
を越す大規模な文庫まで種々あります。  
運営も、個人、グループ、町内会、団地  
等これも様々です。

たいいての文庫は、市立または県立の  
図書館から団体貸出しを受け、文庫の蔵  
書と合せて五百冊ないし千冊位を置いて  
いる所が最も多いのです。

開館日は一週に一度が大半で、土曜か  
日曜に二時間から三時間位やっています。

世話人は、個人の文庫では一人が多い  
のですが、町内会、団地などでは、図書  
係が交替でやっています。図書係は、六  
人から十人位がもっとも多いようです。

### 地域の中心的活動に発展

内容としても、ただ単に本の貸出しを  
しているだけのものもありますが、文庫の半  
数近くは、本の読み聞かせ、読書会、お  
話会など直接本に関係のあるものから、  
新年会、クリスマス会、なかよし会、ひ  
なまつりなど親睦会的なもの、キャンプ、  
いもほり、虫とり、プール、サイクリン  
グ、ハイキングなどリクリエーション的な  
もの、またはピンポン大会、ドッチボー  
ル大会、運動会などスポーツ的なもの

と、それぞれ文庫によって、何らかの行  
事を行っています。

そして、文庫の運営費を捻出するため  
に、バザーをやっているところもかなり  
あります。

大人どうしの学習のために、講演会を  
開いたり、文学散歩、歴史散歩などをや  
っているところもあります。

つまり、地域文庫は、図書館の不足を  
おぎなうことから出発して、いまや地域  
文化の中心的活動にまで発展しているの  
です。

文庫では、大きい子が小さい子に本を  
読んでやったり、紙芝居を見せてやっ  
たり、あやとりや折り紙を教えてやっ  
てる姿を見かけられます。キャンプや遠足  
で、小さな子の面倒を見てやる子もいま  
す。クリスマス会の司会、運営、本の貸  
出しなど子どもの主体でやられるところ  
も増えてきました。

私たちは、文庫を本のあるたまり場と  
か、遊び場というぐあいに考えていま  
す。本を仲立ちにして、人と人のふれあ  
う場所だと思っています。

### 文庫の会で相互の交流

最近の子どものテレビの影響で本を読  
まなくなったという声をよく聞きます。  
しかし、文庫運営者たちは等しく言いま  
す。「それは、子どもの身のまわりに本

を置いてやらないからだ。本さえあれば、そして、そういう環境と施設さえあれば、子どもたちは絶対本を読む。もし、子どもが本を読まなくなったとしたら、そういうことをしてやらない大人たちの責任だ」と。

たしかにそのとおりだと思います。どの文庫でも、子どもが大勢おしかけてきて、うれしい悲鳴をあげています。部屋は狭いし、本はたりないし、世話する人もいないしで、これ以上子どもたちを受け入れることは困難だというわけです。文庫の会員になりたいという子どもたちを、どう断つたらいいか悩んでいます。子どもたちに自由で気楽にのびのびと読書のたのしさを味わわせてやりたいと思います。そのためには、沢山の図書館、とくに児童図書館が必要です。このことは、行政に真剣に考えていただきたいものです。

文庫の連絡機関として「よこはま文庫の会」があります。文庫相互の交流、勉強、運動を目的としています。現在会員は百五十名ほどで、毎月例会を開いて研究しているほか、講座「子どもの本の学校」を開催しています。講師には、わが国でも一流の児童文学者、画家、大学教授などを招いて、七回にわたって講義を聞いています。これも本年は第四期を迎え、受講者は四百名をこえる盛況です。

いま、よこはま文庫の会では、「すべての子どもに読書の喜びを」という考えに基き、障害児にも本を読むたのしさを知ってもらおうと、その絵本づくりに意欲をもやしています。目の見えない子らにも利用できる「さわわる絵本」つまり布

## いずみ文庫の八年間

茂木瑠璃子

切り拓かれて寒々とした中にぼつんとできた団地の中に、子供を持ったお母さんのはいままから八年前のことです。子供たちにとっても、小さい子供があつて遠くへ出ていかれない育児期にあるお母さんにとっても、まさに知識の泉のようなものだったのです。いちばん初めに家を開放された方のお宅では、下の女の子が、まだはいはいをしていたということですから、ずいぶん大変だったろうと察しられます。

現在会員三百六十世帯、千名余り。一日の利用者三百名くらい。運営がスムーズに行われる理由に、はじめの組織作りがきちんとできていたことがあげられるでしょう。貸出し当番に約百名、一人の割当てが一時間半、二カ月に一回の割でまわってきます。会報の配布に約五十名、ガリ切り、プリントとすべてお母さんの奉仕によってささえられています。

製の絵本を、すでにいくつか制作して、障害児施設に寄附して大変に喜ばれています。地域文庫は、これからもいろいろな活動をしていくでしょう。

現在利用者が増えている割には、お手つだいでくださる方が増えないのは、自分たちが作ってささえられているという気持ちが薄いからでしょうか、淋しい気がします。いずみ文庫は貸出し以外に、図書館からの本の入替え、年一回の棚下し（在庫数調べ）と子供会という行事があります。このなかで夏、冬の子供会について書きます。

### 子供会や本を読む会も

いまでこそ団地のまわりには文化的施設が続々できてきましたが、遠くへ一人で行かない幼い子供にとって、子供会は楽しみの一つです。二、三年前から、夏は手作りおもちゃ、たとえば紙染め、染めた紙で作る姉妹人形、ちょうちよ貝の腰下げ、麻縄人形。幼児のためには、かざぐるま。男の子のためには、パッチン、割ばし鉄砲など。

去年の子供会では、ナイフで手を切る

子供が続出で、係のお母さんも現代っ子の不器用さ、過保護ぶりにびっくりしました。

子供会をする前には、文庫仲間の日吉のひまわり文庫へ講習を受けにいった準備をします。冬は紙芝居（これは読みかかせのお母さんが担当します）、人形劇などです。これの準備にも、やはり図書館仲間の品川のゆたか図書館や源氏前図書館にお願いして、人形を借りたり、知恵を借ります。

「子供の本を読む会」の資料集めにも力をかしてもらっています。月一回の「読む会」の集りに約十名のお母さんが参加、現在はヨーロッパのリアリズムの流れを系統的に読むということで、アーサー・ランサム、ウィリアム・メイ、フィリップ・ターナーと読み進んでいます。議論百出、個性豊かな集りで、誰が休んでも淋しい気がします。

「よみかかせ」もいずみ文庫を知る上で大切なグループです。「きょうは眼鏡のおぼちゃんだったよ、面白かったよ」と、子供の声からも人気の様子がかげえまします。

最後に、文庫の本ではあきらまなくった小学校高学年以上の子供たちのために、近くに公立図書館を作ってほしいという願いのなかから成長していった「図書館を作る会」というグループがあります。